

Re. カズマが始める異世界生活～終了～

暁月神威

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、カズマは不変な死を遂げた。何処からか声が聞こえる。

「愛し……てる」と。

そしてリゼロの世界に飛ばされる。

そんな事を知らないカズマは、触れてはいけない禁忌に手を出してしまった。ことも無く、ダラダラと使用人になり、いろんな人とダラダラと駄弁していくストーリー。

PS すいません。終わりにしました。

目 次

ロズワールと仲間達 ((?・▽・?))

カズマの夢	1	あなた、ホモですか？はい？Yes	—	—	1
カズマの現実	2	あれつ？夢何見たつけ？	—	—	4
カズマの現実	3	ロズワールはホモなのか？とりあえず怖い！	—	—	—

カズマの現実	4	ペテルギウスは、いい人だった by カズマ	—	—	6
--------	---	-----------------------	---	---	---

9

カズマの現実	4.	5	ペテルギウスとの関係	—	—	—
カズマの現実	5	ここでもまたやつちまた…	—	—	—	—
カズマの現実	6	また、魔法発表会	—	—	—	—
カズマの現実	7	まさかのコラボ	—	—	—	—
カズマの現実	7	あれ！入れ替わってる？	—	—	—	—
カズマの現実	8	いつの間にか終わらした入れ換え編のあと	—	—	—	—
睡眠不足。	—	—	—	—	—	—

21

カズマの夢 9 魔女様と喋りましょう

カズマの現実 10 再びサテラ襲来

カズマの現実 11 佐藤カズマの契約講習

カズマの現実 12 驚き轟き魔法のステッキな回

カズマの現実 13 大変長らくお待たせ致しました。ヽ(

;

気まぐれシリーズ

気まぐれシリーズ R e : カズ編 第1話

35

32

o

30

27

25

23

21

口ズワールと仲間達 ((?・▽・?))

カズマの夢 1 あなた、ホモですか？はい？ Yes

これはある少年の話です。

カズ「あああああ、助けてくれえー！なんで俺ばつか男に好かれ
るんだああ！」

ミツ「佐藤カズマ！魔剣を売ったんだからその責任をとつて俺と付
き合ってくれー！」

ダス「おうカズマか！俺と付き合ってくれよ！」

カズ「誰が付き合うか！馬鹿か！それならリーンなどなど色んな女
の子の方がいいわ！」

リーン「そそそ、そうつ。// なつなら付き合つてもいいヨ・：

// /

めぐ「なつ?!カズマは渡しませんよ！カズマは私の物ですから！」

カズ「もういいです！もういいですから！調子に乗りました！もう

しません！」

???「zマ！kズマ！カズマ！起きろ！」

カズ「なんだ。夢か…」

ダク「夢か?!どんな夢だつた！//もしかして、カズマが私に言
葉責めをする夢か？ビビ」

カズ「それは絶対ないから！」ガチャ

クリ「助手くん！新しい神器が見つかって、だつダクネス?!今のは…だから違うからねつ！あつ、痛いよ！ダクn」

ダク「また、なにか見つかつたのか。ほらつ、言ってみろ。またな
にも言わず盗むのか…悲しいナア、クリス…」

アアイタイヨダクネス！タスケテ！ジョシュクン！アアアアアア

カズ「こうして、今日も始まつた。」

次の日

カズマは、夢を見るが絶対自分が損をする夢をみてしまう、可愛そ
うな少年です。

クリスは、カズマの夢を見ることができないが、エリスの姿になる
と夢を見ることが出来ます。実は、カズマのことが好きだつたりす
る。

カズ「はつ！また夢か… エリス様が、俺のことが好きだつたらい
いのに…」ゴンツゴロゴロゴロ

クリ「ちょ！助手くん！//なに言つてんの！そんなワケないで
すよ?!」

カズ「エリス様口調がおかしいですよ！」わ

クリ「ゴホンツそんな事ないよつ！きつと… って、そこじやなく
て！なんでそんな事言つたの？」

カズ「ああ、それは夢を見て、はつと思いついたんだよ。つてこと
で付き合つてください。」

クリ「なつ、なに言つてるの！//付き合うのはまた今度ね！ねえ
ねえ助手くん！それは置いといてご飯食べに行かない？それか、なに
か作つて？」

カズマ「今度ならいいのか…ああ、食べに行こうぜ！デートか！」
クリ「助手くんが作つたのが食べたかつたな…つて、ででで、デー
トじゃないよ！」

カズ♪（慌てるクリスは、やつぱり可愛いかったのだつた。）
クリ「かわつ、もう！またそう言う！そう言つてばつかだとぶんぶ
んなんだからね！」

カズマ「ふんふんつて、今日日聞かねえな… じゃつ！ない！違う
アニメだ！それはっ！」

クリ「つい、言つて見たかつたんだよね。このセリフ。」
カズ「もういいよ！終わりだ、終わり！」

アソダーグラウンドアソダーグラウンド
そう、これは少年カズマの夢から始まる異世界生活なのです！

アク「まあ、間違つていなゐわね！つて私が出て無いぢやない！」

ちゃんとだしなさいよ！

カズ「どんまいまあお前だからな……あゝあ、違う世界に行きたかった。もういいか！かえ……ろ……う」ドサツ

アク「えつ？どうしたの？カズマ。大丈夫？……えつなんで？あ、えつとリザレクション！えつなんで効かないの？起きてよ！かじゆま！」グスツ

カズ「はっ！なんで寝てたんだ？つてかここ何処っ！」

おわり

カズマの現実 2 あれつ？夢何見たつけ？

転生失敗 part1

カズ「あわわわわ、なつ、なんで此処へ？同じ異世界だが何故こつちの異世界へ?!」ガチャ！

レム「どうしました?!スバル・ク・ン… 誰ですかツ！スバル君を何処にやつた！」ギロツ

カズ「えつ？つとだれ？それに此処はどこ？あつ、えどその鉄球は… なに？」ガクガク

レム「これは、貴女を殺すためのものです！さあツ！スバル君を出せ！」ガチャ

スバ「帰ってきたぜ！マイルーム… えつ？何この状況」チラ
レム「えつ？つあ、スバル君おかえりなさいです！この状況は、力
ク力クシカジカ… つてワケです。えつと、すいませんでした、お客様。」

カズ「うん、いいんだけど… 改めてだれですか？そして此処どこ？」

なんやかんやで全員集合

ロズ「ああらためて、挨拶といこおおじやあないの。まず、わあうたしは、「またまたカット」うん、酷いじやああないないです。」

全員自己紹介終了

デスツ！

カズ「まあ、此処は俺の居た世界じゃないことがわかつた。まず一つ、なんで俺が料理させられてんの？まあいいけど。」

ラム「貴方の能力を試しているのよ、カズマ。分かつたらさつさと手を動かしなさい。」

スバ「なあ姉様、なんでカズマにはあんまり悪く言わないんだ？」

ラム「ラムは言う相手は選ぶわよ、頭が更に可笑しくなったのね、可愛そうなバルス」

スバル「姉様マジ酷い！… それはそうとカズマは料理すんのか？
「たまにするぞ、なんでだ？」いや、手際がいいからさ。」

カズ「… つと、出来た!! 今回は自信あるぞ、ラムレムよ！ 食べて
みてくれ。あつ、ついでにスバルも。」

レム「わかりました。さっきのご無礼を通して、真剣に審査いたし
ます！」

ラム「私も、レムの審査以上に厳しく審査するつもりよ。覚悟しな
さい！ カズマ」

スバ「俺つてついでかよ、まあいいや。同じ日本人として覚悟しろ
よ！」

カズ「じゃあ、食べてみてくれ！ 不味くはないはずだ。それと、こ
の料理は、カレーと言う。大体中辛位だから食べてみてくれ！」

スバ「最初は俺だ！ ああ、カレーをこの世界で食べられるなんて思
い付かなかつたぜ。さて、アグアグ ゴクン… 甘すぎず辛すぎず、
うますぎだろ?!」

レム「では、次はレムが食べますね！ なかなか良い匂いですね！ 香
辛料ですか？ 「ああ、まあ辛味付けとかもあるしな」… つ次は味

ですね。ハムハム ゴクン… 辛さが、甘さでマイルドになつて食べ
やすい辛さになつています。簡単に言うと、凄く美味しいです。」

ラム「最後はラムね。さつさと終わらせましょう、アムアム ゴク
ン… 悔しいけど美味しいわね。辛さが尖らず甘さが目立たないか
ら美味しくいただけるわね。」

カズ「ありがとよ！ そう言つて貰つて嬉しいや！」 ソトソカチャ

エミ「なんか良い匂いがするんだけど何かしていたの？」

スバ「あつ、エミリアたん！ 今は、カズマの料理が美味しいかを調
べてたんだよ。あつ、皆にしらせてくるわ！」 タツタツタツ

カズ「おれの日常は破天荒だ… ハア」

カズマの現実 3 ロズワールはホモなのか?とりあえず怖い!

オーラより怖い人物、その名はロズワール

カズ「みんな来ちゃたか…まあいいや!まず、これを夕食にするのか?」

ラム「それでもいいわよ。悔しいけど美味しいし。」

レム「じゃあ、早めの夕食にしましょう!」パ

そして夕食になつた

ロズ「パクッ…ラム達に美味しいってえ、言われたあくのだけど、想像いじょおに美味しいつじやくはないの。カアーブスマ君、使用人になあくらいいかね?」

ラム「それじやあバルスは用済みね。早く荷物をまとめて出て行きなさい。」

スバル「いきなり解雇宣言?!酷くね!たしかに料理は駄目だし。裁縫しか出来ないけど…って、あれっ!俺つてまさか使えない?!」

ラム「冗談よ。」

カズ「それは置いといて、えっとロズワールさん?お言葉に甘えて使用人にならせてもらいます。よろしくお願ひします。」

ロズ「まあ、さか本当になつてくれるとはあくね。それじやくあさつそく奉仕をしてもらおうじやくかないか。みんなに感想を聞きなあくよ。みんな感想を聞いてほしきかもよ。」

カズ「そうつすかね…じゃあ聞いて見ます。ロズワールさま、さま。」

ロズ「ダメ口でいいんだあくよ。そこのスウーバル君みたいに。」

グツ

カズ「じゃあそさせてもらうわ。ロズワールさん、貴方について行きますよ。何処までも

。」

ロズ「それはあ、嬉しいじやくないカアズマ君。だけどなんかすうぐ離れていいきそうちじやない。」

カズ「そんな事ないデスヨ。それより、なんでみんな引いてんの？」

「「「「カズマにそんな趣味があるなんて…」「」「」」

カズ「いや、ないから！まあいい、それで味はどうですか？皆さん！」

エミ「なんかすごく美味しい。でも辛い。」

カズ「エミリアは、辛いのが苦手か…わかつた。えつと…あつた、マヨネーズをちよつと入れて混ぜて見て。味が少し変わるけど美味しいから。」

エミ「うん。マゼマゼ出来た！パク モグモグ…あつ、ほんとだ！美味しい！辛くなくなつて味が少し変わつてるけど。」

カズ「良かつたよ。喜んで貰えて！えつと次は、パツクで！」

パツク「うん。僕はこのカレーツ物は初めて見るけど思った以上に美味しいと思うよ。ベティは、どう思う？」

ベア「私は、このカレーツてやつは、悪いけどあんまり好きじゃないかしら。」

スバ「まさか辛いから食べられ無いとか「そんなんじやないのよ！！」か。まさかの辛いのが、苦手だつたのかwww。」

カズ「済まなかつた。辛いのが、苦手な人がいたなんて知らなくて…。次からは2つの辛さを作るから。」

エベ「…「ありがとう」なのよ」

カズ「ああ、わかつた。えつとロズワールさん、達成したぞ。」

ロズ「まあ、た、作つてえ、ねカアズマ君。ご褒美は、頭をなあうでなでしいくて上げるよ。」ナデナデ

スバ「嬉しくないだろ。おっさんに頭撫でられるの…つて以外と喜んでる？てか泣いてる。?!」

カズ「ごめん、なんか昔の父さんおもいだして…一時期ロズワールさんみたいな話し方にはまつてて…それでいじめられて泣いてた時、頭をなでらてグリグリしなかつたのにびっくりしたな。まあ、ロズワールさんが父さんみたいだな」と、おもつた。」グスツ

ラムレム「スバル君が泣かせた。酷いです。最低です。」

カズ「実際失礼ながら家族だと思つてる。かも知れない。」

ロズ「カアズマ君。カアズマ君の中での家族構成は、どうくなつて
いるのかあくな。」

カズ「えっと、ロズワールさんは父さんで、ラムが姉、レムが…
犬っぽい姉、スバルは… 気の合う友達、ベアトリスは頭が良い妹、エ
ミリアは母さんか妹つてかんじ。」

ロズ「わあうたしがお父さんかあくな。以外と好印象なあうのかな
?」

スバ「お父さんがロズつちつてなんかいやだ… つて俺つて家族構
成の中に、入つてない！なんでだ！カズマ」

カズ「いやう、スバルつて家族つて感じじゃないんだよ。どつち
かつて言うと、親友つてかんじだから。すまん、スバル。」

スバ「親友… 確かに言われみたら家族つて言うか友達みたいな存
在だからな！カズマは！」

ラム「レムレム、バルスはちよろいわね。」

レム「姉様姉様、カズマ君が巧みな話し方をしているだけです。」

スバ「ちげえから？！カズマは親友なだけだから！」

カズ「すまんが、ロズワールさん、明日だけこの呼び方でいいです
か？」

ロズ「まあうあ、面白いかあうらしいとおうも。ラム達はどうかあ
うな？」

ラム「はい。ロズワール様がよろしいのなら。」

ロズ「ラムの本心はあう、どうなのがあうな？」

ラム「弟は、スバルじやなきやいいです。」

レム「弟…ですか… 初めて自分より下が出来る… 嬉しいで
す。」

カズ「明日だけでも願うぜ！」

END

カズマの現実 4 ペテルギウスは、いい人だつた b y カズマ

意外とまともなペテルギウス

カズマ「ファ～朝か… 着替えないと… つて着替えがないや。」バンツ

スバル「カズマよ！ 目覚めよ。この俺について来い！… あつ、起きてたのか… 物凄く恥ずい//」

カズマ「どうした？ てか、着替えがないしどうすればいいかな。」ガチャ

レム「おはようございます。カズマ君、さっそく服を調整します。来てください。」スタスター

カズマ「えつとおはよう、レム姉。今行くわ！」タツタツタツ

スバル「あつ、ちよつと待てよ！ 少しは反応してくれよ！ 僕がバ力みたいじやないか！」

そして被服室に到着

ラム「やつと来たわね。そしてバルス、五月蠅い。」

スバル「辛辣！ 姉様辛辣過ぎるよなあ、カズマ。」

カズマ「そうか？ 本当の事なのになあ。ラム姉は、素直な気持ちをいつて相手に気を使わないところが、ある意味優しいと、思う。」

ラム「分かつてるじやない、カズマ。素直なラムがラムらしいじゃない。ねえ、レム。」

レム「はい。姉様の相手を思つて本当のことを言う所が、姉様の可愛い所です。」

スバル「そーか？ まあいいや。そしてカズマ、今日は、本当に家族みたいによぶのか？」

カズマ「ああ、いって言われたし、ロズワールさんは本当にお父さんみたいだし…」

レム「では、さつそく仕事をしましよう！ カズマ君は、料理の方を、先にやつといて下さい。」

後でレムも手伝えます。」

そうこうして朝食になつた

ロズワール「本当にカア～ズマ君は、料理が美味しいじゃあ～ないか。どうしてこんなあ～に美味しいのかあ～な？」

カズマ「こっちで言うと… 加護って言うのかな。まあいいや、父さんは真っ黒い本つて知らない？メイザース領に迷い込む前に、助けてくれた人がもつてたんだけど。たしか『服音』つて言つたけ？」

ロズワール「!? その話はまた後ではなそお～じやあないか。まあ、はあ～なしは戻るがあ～加護かあ～ね？」

レム「そんな加護あつたんですか。他にあるんですか？カズマ君。」
カズマ「弓が当たりやすくなる加護や短剣が扱えやすくなる加護とか、見つかりにくくなる加護等な感じです。」

ラム「なんかムカつくわね、加護持ち過ぎじゃない。」

カズマ「加護っぽい感じの紛い物だから、と言うか魔法寄りだから加護じやないよ、ラム姉。」

スバル「それでも凄いよ。カズマは、つて言うかこの世界の魔法じやないだろ。」

カズマ「まあね。でも教えないよ！俺の秘密特権だから。て言うか、教えられない…」

エミリア「それってどう言うの？後で見せて！カズマ！」

カズマ「父さんと話した後ならいいよ。」ウン イイヨ

ベアトリス「私も気になるのかしら。後で見させてもらうのかしら。」

パック「うん、僕も見たいかも～。」

ほか3人「見させてもらう。」

カズマ「結局みんなか。良し！やりますか！」

EMTアツ、ヤベツEND

カズマの現実 4・5 ペテルギウスとの関係

ペテルギウスは命の恩人

カズマ「さて！父さん、ペテルギウスさんとの関係を話すよ。ロズワール「わかつたのだ！あよ。カズマ君、話してくれたまゝえ。」

パパ風

カズマ「いつた、ここどこだ？見たとこ裏路地だな。なあ、ここどこだ？つてなんで殴つてきた？」

トン・チン・カン「金目の物だしな！」

なんやかんやで

カズマ「ぐはっ、な なんでまた死ぬんだよ… まだ死ぬ気は無い！」バサツデスツ

ペテルギウス「おやおや、こんな所で何をしているんデスか。こんな弱そうな人を狙うことしか出来ないのデスか？あなた、怠惰ですねー。」

トンチンカン「魔女教だー！逃げろー！」タツタツグシャ

カズマ「えつ、今何であいつら死んだの？あつ、あのありがとうございました。助かりました！」

ペテルギウス「貴方、何故そんなに魔女に愛されているのですか？いま、傲慢の席は空いているので、よかつたら入りませんか？」

ああ、魔女教ってのは、アクシズ教団なみのめんどくさいのかな… ことわろう！

カズマ「気持ちはあるがたいですが、すいません、いまはきめられません。ですが、ここに来たのは初めてなので、ついて行つて良いですか？」

ペテルギウス「そう言う人は、初めてデスウ！この私に、案内をさせるとはあ！実際に実にいい、脳が震えるう！。ああ！サテラよ！このワタシにい、新しい試練を下さつたのかあ！」

わかりました！ああ！申し遅れました。ワタシは、魔女教大罪司教 怠惰担当

ペテルギウス・ロマネコンティ… デスッ！以後お見知り置きを。」

ああ、こいつ根本的に狂つてるわあ。マジめんどくさい。なんで助けてくれた人がこの人なんだろう。俺つてろくな奴が仲間にならねえ。呪いか！この野郎！

カズマ「サテラって誰だ？まあいい、これからよろしくお願ひします。ペテルギウスさん。」

ペテルギウス「さつ、さつそく認めて頂いたのデス。このまま信頼してもらえばいいのですかあ、サテラよオ！」チナミダダラー

このまま全部カット

カズマ「つて、感じだな。父さん、えつ、なんで泣いてる!? なんで

!?

ロズワール「いゝいや、泣いてなんかいないのだゝあとも。それよりも、結構大変だつたんだゝあね、カズマ君。正直に言うと、楽な道をゆつゝうくり生きて居そだつたからねゝえ。ゴメゝエンね、カズマ君」

カズマ「楽な道を歩いて来て、悲しませて来ちまつたからな… 俺。

ロズワールさんは、この後、俺の魔法見ます？くるなら絶対来てください！」

カズマの現実 5 ここでもまたやつちまつた…

ステイー

ルは危ないや！

ロズワールと話した後、ロズワール廷のみんなにカズマの魔法見せることになった。

カズマ「良し、みんな集まつたな。まず、狙撃スキルを見せようと思います。『狙撃』!!」

と言い、遠くにある約56m先にある木の、印が書いてある所のど真ん中に、綺麗に当たつた。

スバル「うおおおお、あんな遠くにある的に1発で当たるとか、凄すぎだろ！マジすげえ…」

エミリア「カズマスゴイ！あんな遠くにある的を当てるなんて、私びつからこいたわよ。」

他の皆様の感想をきいたあと…：

カズマ「そんなに褒めることか？まあいや、次は、窃盗スキルだ！『ステイール』!!」

ステイールを使い、適当に物を取つた。そして、取つた物は何か物凄く重かつた。取つた物は何とレムの…：

レム「え？何で私のモーニングスターをカズマ君が持つているんですか！？もしかして、これがステイールと言うやつですか！？凄いです！」

パック「へえー、これがカズマの魔法なんだ。初めて見た。コレって見たことある？ベティ？」

ベアトリス「こんなの初めてみたのよ、にーちゃ!?」

カズマ「スゴイだろ！えーと、スバル風に言うと鬼掛かつてるだろ！」

などなどの魔法を見せたカズマは、スバルと一緒に

リング売りのおつちゃんの所に行つた。

リング売りのおつちゃん「おう、何買つていく？」

スバル「俺は天下一の一文無し！って言うのは置いといて、フェル

ト見なかつたか？」

そうして見たことを知つたスバル達は探

した。そして見つかつた。

フェルト「なんか用か？ 兄ちゃん達。えつ、魔法を見て欲しい？ 別にいいけど。」

スバルは、フェルトにカズマの魔法を見せたいのか、勝手に魔法を見せる約束をしてしまつた。その頃、カズマとフェルトは若干顔を引き攣らせていた。

カズマ「はあ、別にいいけど人の事をかんがえろよ。： フェルトよ、いくぞ！『ステイール』!!」

そして、カズマはステイール好例の盗み、フェルトのパンツを取つてしまつた。カズマは、必死に謝つた、だがフェルトは、最初は許さなかつたが、最後はスバルが悪いと言う事になつた。

して… 言つてしまつた王道の言葉

フェルト「カズマの兄ちゃん、何でもやるつて言つたな。」

カズマ「やっぱ無しで!!」

フェルト「それこそ無しな、兄ちゃんよ。じゃあ、責任を取つてくれ、に… いやカズマ／＼

カズマ「責任つてどんな意味で!? てか取るならスバルだろ！」

フェルト「いや、カズマが取るべきだな。実際にとつたのはカズマだし／＼」

フェルトは、カズマにパンツを取られて、カズマに責任を取らせる為に告白をみたいなのをした。カズマは、あせつたが、OKをした。それは勿論 I O V E じやなくて、奢れと言う意味だと、履き違えているが…：

カズマの現実 6 また、魔法発表会

そしてまたハブニン

カズマ 「おい！スバル、またやる必要あんのかよ…」

エミリア「うん!! カズマの魔法はなかなか凄いから!! 見せて? カズ

マ

エミリアは上目遣い十瀬目で嫌だと言えないとガスマは
ことになつた。
また見せる

チ』!!

見たいだ！」

ヘアトリス「たしかにヘティの『マナドレインに似てるのかしら』」
カズマは、一通りの感想を聞き、レムにワイヤーなる物を貰つた。

カズマ「次は、『バインド』!!」

「ハインツを捕はれたのは テムだつた
ラム 「? や、おなつにはこ私こかさて、いるの?」

この様なことを繰り返すこと三時間
カズマ「ちよつとマナがた：りな：」
ハ

カズマは、マナ切れで、倒れた

「ハル、あー！ カブマが倒れた！ それよりも
カブマでなんであんな魔法をいっぱい覚えているんだろうな…」

つと、スバルは倒れたカズマをみながらも、ぼそりと言つた

そしてまたハブニン

グ

カズマ達は、また中庭に集まつた

スバル「ああ！また違うのが見たいんだよ！なあ？エミリアたん。」

エミリア「うん！カズマの魔法はなかなか凄いから！見せて？カズマ。」

エミリアに上目遣い+涙目で嫌だと言えないカズマは、また見せることになった。

カズマ「はあ… 分かったよ。スバルよ、いくぞ！『ドレインタツチ』!!」

スバル「!?ぐおおおお、またこの感じかー！ベア子のマナドレイン見たいだ！」

ベアトリス「たしかにベティのマナドレインに似てるのかしら。」

カズマは、1通りの感想を聞き、レムにワイマーなる物を貰った。

カズマ「次は、『バインド』!!」

つと、バインドを掛けられたのは、ラムだった。

ラム「!?ち、ちよつとなく私にかけているの？わた、私を拘束して卑猥な事をしようとしているのかしら。//」

この様なことを繰り返すこと3時間

カズマ「ちよつと、眠くなつて来た…ああ、またパーテイーの皆に会いたいなあ…」

突然倒れたカズマにみんなが畠然している中、カズマはありえるはずの無い声が聞こえる…

???「アナタも…いい…かも…中身をかえて…見よう…うふふふ」

…静かに、何処か嬉しそうな声がひつそりと響いた…

カズマの現実 特別編 まさかのコラボ

この世界に訪問者が

カズマ「よし、ちゃんとマナも戻ったし、部屋にもどろうかな…」
う… 頭が… 痛… い」

突如起きた頭痛で倒れてしまつたカズマは、また夢を見た…
??? 「ふふ、やつぱりこの人は、面白い。愛しい… そして愛らしい。
の人には、劣るけど、思った以上に、愛してしまう… ふふふ… 1
日だけ、の人間を入れてみよう。」

その声を響かせた者は、この世界で恐れられている嫉妬の魔女サテ
ラ、だがサテラは人間と同じように物を愛し人を愛し生き物を愛して
しまう優しい女の子なのかもしれない。

零「(*、▽、)ノヤア、この世界の人間の錐榔 零だよ！いや～こ
の世界だと話し方が可笑しいだよなあ。まあいいや、もとの世界に
帰りたい。まあ、何かこの世界に来させたキンジにはお仕置きをする
ことにして、どうやって町を出ようか、まあ、見かけた人に聞けばい
いか。あつ、早速俺と同じような背格好した青年に話を聞いて行こ
う。」

カズマ「ん? どうしたんだ? あ〜、あんたもこの世界に飛ばされた
んだな… 錐榔零… それがあんたのなまえね、俺の名前は佐藤カズ
マ! よろしくな! 零。」

零「ああ、よろしくねカズマ!」

こうして自己紹介をしあつた二人は何か馬が会うらしくしばらく
話したあとカズマがロズワール邸に行くことになつた。そこまでの
道のりではなしたことは、この世界の常識のことだった。

カズマ「まず、この屋敷の人を紹介する! 一回しか言わないからな

! w w w

零「あはは、なぜ体育教師みたいな言い方なんだよ。まあいいや、挨
拶しにいこう! カズマ。」

カズマ「じゃあまず、この館の使用人、ラムレムスバルです。どう
ぞ! 的な感じで言うけどこのネタ通じない… まあ、出てきていいよ

！」

スバル「まずおれからだ！俺はスバル！天下一の無一文！よろしくな！零！」

ラム「つぎは、私よ。私はロズワール様に仕えるメイドの一人ラムよ！レムは私の妹よ。」

レム「最後はレムですね！私は、ロズワール様に使えるメイドの一人のレムです！よろしくお願ひします。ああ、あとスバル君のお嫁さんになるものです。」

そのあと、ロズワール邸の皆と挨拶をしたあと特に何もなかつたので、飛ばして、零のせかいのことをカズマとスバルで話していた。

カズマ「零はアリアって子この事を好きなのか？」

スバル「まあ、確かに気になるな。教えてください！零さん！」

零「わかんないな。正直自分の気持ちがいままで戦うことばっかり考えていたからまだ自分の気持ちに気付いていないのかもね。……何故かからだか薄くなってきたな。もとの世界にもどるのかな？カズマ！ありがとうございます！少し心が軽くなつた気がするよ！またな！」

カズマ「行つちやうのか、また来いよ!! いつでも待つてるからな!!」

こうして、コラボは終わつたのであつた。

カズマの現実 7 あれ?!入れ替わつてる!?

何故かからだか変わつて… いた…

??? 「うふふ… この人をあの人に… うふ… 愛し… てる…」

そして、カズマが倒れたあと、意識が完全に無くなる前にちょこつと聞こえた。そして、カズマが意識がなくなつたあと、今度はスバルが、意識をなくした。だが、その時の出来事は面倒… ジゃなく、まとめて書けないので省かせてもらいます。

そして、カズマ達が、目を覚ました。

スバル（カズマ）「んつ？此処は… つて倒れたんだつけ？あれ？そこにいるのは誰だ？てか、何で俺がスバルの服をきてんだ？」

カズマ（スバル）「… ッは!! ここはどこだ!!… あ、あれ？ 何でおれが目の前に？エツ？」

二

俺たち入れ替わつてる!? なに? そのラノベ展開!?

」

大声で叫んだカズマ達にロズワール邸のみんなが、なんだなんだと驚いている顔をしているなか、等の本人は放心状態だつた。ちなみに、つぎからは、『仮』カズマ（スバル）などではなく、カズマ^{スバル}にします。

ベアトリス「どうしたのかしら。いきなり大声で叫びはじめるから、何かあつたかと思つたのかしら。紛らわしいのよ。ツたく。なんのかしら！」ドキドキ

レム「どうしたのですか!? 敵ですか!? 魔女教ですか!？」

そう言いつつと、驚いて震えているベアトリス。そして、また何処からともなく現れるいつか見た鉄球・モーニングスターを構えているレム。だが、何故かレムが来た瞬間^{カズマ}スバル異常なほどに震えが収まんなかつた。最早半泣き状態だつたのである。それにきずいたカズマ^{スバル}は、頑張つてスバルを説得したのであつた。

みんなが落ち着いて、どうして入れ替わつたかの理由を

言つたカズマ。直しが、わからないスバルたちに、ロズワールが、以外にも意見を言つてくれた。

ロズワール「いいやあ。君達は、どうして中身が入れかわつたかを考えた方がいいのじやーかないのかね？」

ラム「そうよ、バルス。まず入れ替わつた原因を分からせないと直し方が、思い付かないから、早く原因を思い出しなさい。バルス」
カズマ「ええ!?俺がかよ!姉様何か酷くない?なあ、カズマ。」
スバル「いいや、確かに原因を探し出さないと、戻れられないかもしれないしな:」

実はカズマは、入れ替わつた理由を知つてゐるが、本当かどうかがわからぬから、言おうか迷つてゐる設定です!!

そして、ロズワール邸の謎が、1つ増えた。この気まぐれな魔女様に祝福を!!

カズマの現実 8 いつの間にか終わらした入れ換 え編のあととの睡眠不足。

眠いけどがんばるカズマの日常

???「もう…い…い…や…愛しのあの…人は…やつぱりそ
の：姿が…い…い。ふふつ」

と、何故か毎回出てきている気がする嫉妬の魔女こと、サテラさんの敬愛に愛情を注いだような一途な愛に重いなと思つた作者は握り潰されたが、聞こえているカズマは（やつぱりこの人…サテラさんが俺たちを入れ換えたのか…）と、思つたのだが確信にかわつた。まあ、いろいろと思つたことがあつたのだが、まあいいやとを考えを放棄したカズマは、目を覚ました。

カズマ「いやあ、なんだかんだでこんな内容が薄くてつまらない小説を見ててくれている人たちに土下座した方がいいと思うな作者が。まあ、そんな当たり前なことは置いといて、スバルはちゃんと元の体に戻れたかな…。そんなことよりお腹減つたな、今何時だろ。」

そんなことを言つていたカズマの元に一人のてんす：メイドが、舞い降りた。

ラム「窓を閉めなさいカズマ、風邪をひくから。はあ、バルスと違つて風邪をひいてしまうから…と言ふとでも思つてゐるの？ハツ！バルス。早く起きてレムの手伝いをしなさい。ロズワール様にご迷惑をかけてしまうから。」

そうやつて見下す視線で、厳しい事を言つてくるラムさんに、元に戻つていることを説明した

ラム「そう、やつと戻つたの？バルスだと思つてたわ。悪かつたわね、カズマ」

そう言つてきたラムにカズマはイタズラを仕掛けた

カズマ「本当にカズマとレムに甘くね？！なあ！姉様！」

少し驚いていたが、そんな嘘をすぐに見破つて少し怒り気味にこう

言つてきた

ラム「カズマ？冗談が過ぎるわよ？この寛大なラムも怒こつてしま
うわよ？…」エル・h y「すいませんでしたあ！！何でもするので許し
てくださいッ！」…はあ、しようがないわね。何でもするならバル
ス以外に『カズマに襲われそうになつた』と言わないですかね。あ
と、バルス以外の人に何でも1つ言うことをきいてもらうわ。」

カズマ「そんなことを言うんじやなかつた…まあいか！断つた
らそれ以上の最悪な目に遭うし…」

…と、何故か理不尽な条件を出されたカズマは、諦めて
その条件を飲むのであつた。

追伸 カズマとスバルの入れ替わつたのは、作者がストーリーを考
えた癖にこんがらがつて辞めただけです。それと、このすばメンバー
は出せたらいいなと思つています。まあ、出せたとしても、2章に入
らないと意味がないんですけど。b y 晓月神威

この怠惰な作者に文才を!!そして内容を!!

カズマの夢 9 魔女様と喋りましょう

夢だと思った？ 残念、魔女様です！

ある、カズマが目覚める五分前に起こつた事である。

いつもの、嫉妬の魔女？ サテラの独り言を聞いているカズマに新しいスキルが加わった。それは、サテラと話が出来るようになつた。早速話しかけられるカズマは、次のような話をした。

サテラ「ふふつ、やつと話をちゃんとしてくれるようになったのね？ 私、びつくりこいちゃつた。まだ、あの人とはあんまり話したことないのに…」

カズマ「えつ、いやはじめまして？ 佐藤カズマです。えつと、魔女さん？」

サテラ「ああ、忘れてたわ。私は嫉妬の魔女？ サテラ。何故か魔女つて言われるの？ なんでだろ？ まあよろしく！ カズマ。愛してる」

カズマ「あ、ああよろしくサテラ。つて愛してる！ え、えつとあります？ でもでもサテラが愛してるのはスバルなんじやないか？」

サテラ「あの人も愛してる。だけど貴方も愛してるから！ だから、貴方は…」

と、言つたサテラは目のハイライトを消して俗に言うヤンデレのような目をしていた。そして、カズマの意識が遠くなる時サテラは目の前で、「また、話そうね？」と言ひ頬を赤くしていた。

カズマが目覚める0分後

カズマ「ふあ、寝た気がしない。サテラは何か誰かに似ているな…。まあいいや、早速仕事でもはじめますか！ つて、事をアクア達に聞かれたら驚かれるな。だつて自分が一番びっくりしてんだもん。」

そうやって独り言をしていたらラムがカズマの部屋に入つてきた。

ラム「はあ、何時もより遅かつたから、何かと思つてラムが直々に来てあげたのに、なにずっと独り言を言つているの、カズマ。はつきり言つてバルス以上に可笑しかつたわよ。」

カズマ「おお、それはマジでやべえぞ。まるつきりバカじやないか。俺、シャマクなんて使えないのに。それは置いといて、もしかしてレムさんが、今日やることを終わらしちゃつた？」

ラム「ええ、カズマが起きないからレムが『カズマ君は、珍しく寝坊なんですね！早く終わらしてカズマ君の寝顔を見なければ!!』つて、言つていたわ。カズマ」

また、ドアが開く音がした。音がした所を見てみるとそこには、少し残念そうな顔をしたレムが立つっていた

レム「おはようございます、カズマ君！今日は珍しく寝坊ですか？そんなに疲れていたんですか。すいません、そんな疲れているのに無理をさせてしまつて：」

カズマ「いや、そんな訳じやないから大丈夫だよ!!多分。何かサテラつて言う女の人がいて、何故か自分以外を愛したらダメ見たいに言つてきた。

そうしたら、何故か二人が可愛そうな目でカズマを見ていた。カズマは何故か二人の視線に恐怖を感じていた。

カズマの現実

10

再びサテラ襲来

最近、出番ないのかしら b yベアトリス

カズマは寝ようとしたのだが、何故か不思議な空間に吸い込まれた。ちなみに、物凄く朝に近い夜の時間なのです!!ああ、カズマの体はベッドの上にありますよ?

カズマ「はあ、またここか…眠い…眠つてみたいのに何故か気付いたら此処にいたのだが、サテラは嫌がらせが好きなのか?それならスバル並みにうざいんだけど…」

サテラ「えつと、ごめんなさいね?あとうざい?えつと…その…:うう」

後ろにいたサテラに気付かないカズマは、サテラに向けて悪口を言つてしまつた。それを聞いていたサテラは、泣きそうになりながら謝つていた。それに気づいたカズマは、焦りながら謝ろうとしていた。

カズマ「えつ!?サテラ居たの!!そしてゴメン!!すいませんでした!!だから泣かないで!もうこれ以上『クズマ』さんや『カスマ』さんなどと言われたくない!!何でもするから!!」

それを聞いていたサテラは嬉しそうな、それでいて嘲笑の混ざった笑みを浮かべていた。

サテラ「えつ!?本気にしていたの?それに何でもしていいの?じゃあね…:」

カズマ「え…ええ!ウソ泣きかよ!それに何でもするとか言つたけど無しからな!」

サテラ「そつ、そんな、悪口言つたのはカズマなのに?ネエネエナンデ?答えによつては…」

カズマ「すいません!!冗談です!だからそんなに濃密な殺氣を出さないで?俺、ポツクリ死んじやうから!ちょ、その刀何!?削ぐ!?何を!」

サテラ「はあ、やつぱり貴方は弄りがいがあるわね!の人とはあんまりと言うか全然話せないから…まあ、いまは貴方が居るからい

いけど♪本当に愛しいわ、貴方私と契約しない？私の知らない魔法も知っているから。それも覚えられたらいなとおもうし！契約した方が貴方のためにもなると思うし、いいと思うんだけど…」

：「ツとサテラから契約の話を受けたカズマは、最初は受けようとした。だが、契約はエミリアやスバル、パックなどからちやんと勉強してからの方がいいと思い保留にした。

サテラ「ええ～。まあいいけど、多分止められると思うわよ。レムって言つたかしら？その子は少なからず魔女教に恨みを持つているから、その元凶のワタシ？から持ち掛けってきたって言つた日には、貴方がまず殺されると思うの！私に…」

カズマ「マジかよ…ん？最後なんて言つた？普通に聞こえなかつたんだけど…」

サテラ「最低私が守つてあげるから！一回聞いてみない？私と契約してもらえたらなまら嬉しいし。」

カズマ「ん～、一回聞いてみるわ！俺もなんだかんだサテラと話すの好きだし：」//

と、恥ずかしながらカツコつけたカズマは、サテラに笑われながら現実世界に戻ろうとしていた。

サテラ「あれ？もう戻るの？じやあね！カズマ。ぜ～つたい聞いてきてね！約束だからね！」

カズマ「おう！またな、サテラ！絶対聞いてくるからな!!また会おう!!」

：「つと、カズマは目を覚ました。時間は、丁度1時間ぐらいだつた。もうすぐ起きないとラムに怒られるんじやないかと思つて、早く起きたのだが全然早かつた…早すぎるのであつた。

カズマの現実 11 佐藤カズマの契約講習

契約どうこうはよくわかりません d y スバル

時刻はたたいて午後6時！じゃないか。多分みんな寝てんだろうな。と、カズマは一人げに小さく呟いた。時間が余つて仕方がないのだ。そこでカズマは魔法の特訓をすることにした!!

や：何してよっかな。久しぶりに魔法でも使うか!!一番

と、まずはクリエイトウォーターを使うことにしたのであつ

六

カスマ＝クリエイトウォーター』!! えっと、普通に使えたんだけど何か威力が上がつてんだけど、眞面目に訳わかんねえ。・・・あつ!! 確か自分で魔法全部レベルアップしたんだつけ? こつちに飛ばされる前にスキルアップポーション? をたくさん飲んでたんだつけ。多分それが死因立つた訳じやないよな? まあ、あと63ぐらいのスカルポイントがあるから大切に使わないとな!』

と、スキルポイントがバカ見たいにあるのは魔王を倒したさいに手に入つたスキルポイントもあるのだつた。それよりカズマが、ずっと独り言を話しているなか、頭のなかでずっとサテラが笑つている。その笑い声が聞こえるカズマは、ずっと頭痛がしているので頭が痛かつた。ので、カズマはもう一度寝る事を選んだ。

カズマ「またサテラと話さないといけないのか。いや！頭痛よりはある程度ましか。ツ！また激しくなつてきた気がする…」

…と、静かな空間に居ることを諦めて眠りについたカズマだつたのだが、今回は運良くサテラに会わないで済んだので、カズマはグツスリと寝れたのであつた。

そこで作者の都合上、時間は丁度朝御飯の時間に飛ばします！

カズマ「あのう、皆さん少し相談があるんだけど……」

カズマ「えっと、カズマとかエミリアのしている契約?について聞

きたい事があつて。」

エミリア「えつと、契約についてかしら？少し話すのに時間がかかるから、ちゃんとご飯食べてから話そうと思うの。でもカズマがそういう事を聞くのは以外で、私おつたまげちゃった。」

スバル「エミリアたん、おつたまげたとか今日び聞かねえな。それより、カズマはなんで契約について気になつたんだ？」

スバルは、みんなが思つてることをハッキリとカズマに伝えた。するとカズマは：

カズマ「いやあ、ある人に契約をしてみないかつていわれてさ。」

エミリア「因みに、ある人つて誰なの？ちょっと気になるかも！」

カズマ「言つても驚かないでね？それでも良いならいいけど、下手したら俺みんなに殺されるかもしねいし：」

ロズワール「そんなに危ない人なのかな～あなた？」

カズマ「はい、いやわりとマジで…」

ラム「カズマ、絶対とは言ひ切れないので余程危ない人じやなければ殺さないわ。安心しなさい。」

カズマ「いや、その余程の中に絶対入ると思うんですけど…」

レム「カズマ君、誰なんですか？レムは早く知りたいです！那人は強いんですか？」

カズマ「多分この中で一番強いと思うんですけど…」

パック「へ～、そんなに強いんだ～！でもそこまで強いんだつたら魔女とか剣聖並みなんぢやない？その人は。」

カズマ「多分ラインハルトよりも強いと思うんですけど。」

ベアトリス「ああ、もう焦れつたいのかしら！那人つて一体誰なのかしら!!」

…と、痺れを切らしたベアトリスは、その人は誰だといつた。言つてしまつたのだ。

カズマ「そうだな、俺の言つている那人つてのは、嫉妬の魔女サテラだ。とはいっても嫉妬の魔女とサテラは人格が違うけど。」

と、言つたカズマ以外の全員の時間が止まつた。そう、まるで終焉の魔獸が世界を滅ぼした、世界の中心で絶望に満たされ、全てを諦め

た人間達のような静けさに包まれていた。：

カズマの現実 12 驚き轟き魔法のステッキな回

みんな驚くサテラ様

ロズワール邸のみんなに、サテラの事を話したカズマ。カズマ以外のみんなが驚いて止まっているなか数分後、次々と驚きを露にした。

エミリア「えつ!? いつ嫉妬の魔女とコンタクトをとったの? 私、驚きすぎてぶつたまげちゃった!!」

レム「カズマ君、それは本当ですか! レムは魔女との契約は絶対にやめた方がいいとおもいます!」

スバル「はっ? いや、その、面白い嘘つくな。そんなわけないだろうし……」

ロズワール「えつと、カズマ君、それは本当か? あな。それが本当ならかくあなり危ないのだくあが」

ラム「……カズマ、嘘じやないなら貴方かなりいたい人よ。取り敢えずアル f u ……」

カズマ「いや、ラムさん! それ食らつたら俺、死ぬんですけど!! 一旦話を聞いてくれ!」

ラム「何? ロズワール様に危害を食らわせない用、これしかないのでだけれど」

カズマ「納得させるから! 一回はなしを聞いてくれ!」

ロズワール「ラム。カズマ君のはくあなしを聞いてあげようおじやないか。」

ラム「……わかりました。ロズワール様の言う通り、話を聞いてあげるわ、カズマ」

カズマ「あ、ああ。まず、サテラに初めて会った? のは、俺の夢の中で、スバルを『愛して』って言っていた所からかな。まあ、その描写は書いていないけど。まあ、それは置いといて初めて話したのは、最近かな? 多分レムさん達が言っていた、独り言をしゃべり出し

たときだと思う。それから……

こうして、だいたい三十分ぐらい話した後、みんながやつと納得してくれたカズマ。だが、本題の契約の話を聞いていなかつたのである。それにきずいたカズマは、もう一度、契約の仕方を聞いた。

カズマ「なあ、結局、契約してもいいのか? てゆうか、契約の方法を教えてくれ。」

エミリア「私は、契約しても良いと思うけど……ちゃんと覚えてくれないと、私、カンカンなんだからね!」

エミリアが、良いって言い始めた頃、皆は「もうどうなつても良いやと」と、考えるのを止めた。

少し時間が過ぎて、カズマは、ベアトリス・エミリア・パック・スバルに、契約の仕方を教えて貰つていた。だが作者は契約の方法を知らないから、この部分はカット!

契約を教えて貰つたカズマは、部屋に戻りサテラと話していた。

サテラ「ねえ、カズマ。契約の事はどうなつたの? 私、ちよこつと氣になるわ!」

カズマ「えつと、契約事態は、全然大丈夫だつたんだけど、契約の仕方が良くわからなかつた。」

サテラ「私分かるわよ? 確かあーしてこーして……出来た!! もう契約カンリヨウしたよー!」

カズマ「特別何か変わつた訳じやないよな? まあ、それは置いといて、これからよろしくな! サテラ。」

サテラ「ふふつ、私のことを怖がらない人つて初めて会つた!! こちらこそよろしくね?」

てんてんてん

の

ちゃんちゃんちゃんbyエミリアの歌?

カズマの現実 13 大変長らくお待たせ致しました。ヽ(、 ०、 ;

猿の物覚え?なのよ。d yベアトリス

ある日、カズマの夢の中に、サテラではない謎の女性の声が響き渡つた。だが、その声の発言場所である謎の女性は、カズマに聞こえていることを知らず：いや気付かないまま独り言を喋り始めた。

???「なんででしょう？これでカズマさん：いや、助手君と少しだけ話せるようになるはずなのに…。まったく、私はなんで助手君に惚れちゃたんだろう？女神である私が普通の人間の助手君に…。首を切られたり、折れたり、180度曲がつたり、冗談で告白をしてきたり：とにかく最低で鬼畜でゲスくて面白くて優しくたまに頼もしい助手君がなんで急に消えてしまつたのだろうと思いつ調べたら、この世界に連れてこられたと言わされて来たら出会えない。本当に踏んだり蹴つたりですよ。私にこんな辛く厳しい仕事を押し付けてくるのは、アクラ先輩と助手君だけだよ。これは助手君のため、助手君への愛が強いからこそここまでできるのですよ？そこまで深くなるまで放つていた助手君は責任を持つて私のお嬢さんになつてもらわないと…。さあ、がんばつて助手君を見つけないといけませんネエ。フフフフ：」と、謎の女性の話を『一部分』聞いたカズマは二度目の異世界の中でも一番と言つて良いほどの命の危機を感じていた。考えたら考えた分だけ怖くなるので、カズマは考えるのを止めた。そして、再び眠りにつくのだった。

恐怖の夢から1日たつたあとカズマは、ロズワール邸の中でも一番に起きた。（ただしベアトリスは除く。）早く起きたがやることがないカズマはベアトリスに会いにいった。

五分後、無事ベアトリスの部屋にたどり着けたカズマだったが、スバル達が次々と起きてきたのであつた。

ガチャ…とドアを開きベアトリスに声をかけようとしたとき、驚きの声をあげた。

カズマ「やつと見つけられた・なるべく直ぐ見つけられた頬イの
に。まあいいや、魔法について聞こうかな？おはよう！ベアトリス。
魔法についておしえ・て・・・く'r」

スバル「フフフツ！食らえビヨヨーン！?なにをかしら！死にたくないなら
今すぐやめるかしら！」

スバル「まあ、死にたくないから止めておくが、次は覚えてみてろ
と目に熊か入つて素敵に毛皮で：制度で、好きに熊が刈れるのか・」

ベアトリス「何いってんのよ。馬鹿なのかしら？」

このやり取りを聞いたあと、カズマは話したい内容を思いだしベア
トリスに聞いた。

カズマ「あつ、えと、ベアトリス。ついでにカズマ。そう言えば前、
ペテルギウスさんが使つてた見えざる手？つて言うやつって、今使え
るやつっておるの？サテラに聞いたら、俺も使おうとしたら使えるか
もつて言われたから。」

スバル「マジかッ。俺も使えるぜ！何か変な感じがするけど。」

ベアトリス「つくづくカズマはずるいのよ。またその他に大罪司教
の権能もいつかは使えるかもしれないのかしら。」

カズマ「えつ、マジ!?見えざる手つて使えるやつもいるんだ：何か
悔しい。それはそうと、多分他の権能も使えるようになると思うよ。」

スバル「もうお前、チートみたいな奴だな。そこまで強くなるため
には、俺だつたら最初のほうで飽きてるからな。」

ベアトリス「つてことは、まだお母s：他の魔女にあつてないのか
しら？そこのスバルは一様全魔女に会つたことあるつて聞いたけ
ど。」

カズマ「確かに、まだ他の魔女にあつてないな。どんな魔女なんだ
ろうな。ちょっと楽しみだ！」

ある少年は、まだ見ぬ魔女に期待して楽しみにしていた。

ここから、どういう二度目の異世界生活を作り出していくのか。そ
うこれは、一人の少年が、何故か異世界に飛ばされて適当に生きてい

くストーリー。その少年の名は佐藤カズマ、カズマがその世界でいろんなことをする話だ。そうだ、『Re・カズマが始める異世界生活』ってのはどうだろう。多分良いと思うのだが。

――――――――――――――――――――――――

この作品は、私、暁月神威が妄想と妄想を重ね、誰得?と思わせてしまう作品なのです。それでも見てくれてる人は私の中で勝手に神様つて思っています。この作品で不快な気分などにした方は、誠にすいませんでした。それでも、自分勝手つですが、ちょっとずつ書いていこうと思いました。この作品を見ててくれる画面の向こうの皆様、ありがとうございます。こんな作品ですが、これからも見てくれると嬉しいです。もう一度言わせてもらいますが本当にありがとうございます!

気まぐれシリーズ

Re・カズ編 第1話

寄つて、酔つて、夜。 by カズマ

それは、前話とは全く関係の無い日。え？メタイ？知らないねえ！まあ、そんなことは置いといて、ある晴れた暖かい日差しの中で起きた出来事である。（半分嘘）

ある、中肉中背のぱつとしない茶髪の男、佐藤カズマに起きた不思議な体験。：でもないがカズマにとつて、ある意味不思議な体験だろう。その1部分を皆さんに見てもらおう。では。

カズマ「ア、ア、ア、ア、ア、つたく！スバル！てめえホント何度も同じことやらせんnaよ！掃除が終わつたら見せてやるから、それで最後な？」

スバル「悪いな！ありがとう！でも何度見ても凄いな…：そのスキル。俺にも出来たらいいのに。」

カズマ「いや、無理だから。スキルカードがなきや習得できなしないしな。でも、そこまで言う程スタイルは実用性ないからな？盗賊やつてる訳じやないし。（まあ、俺的には…：いや、やめとこう。消される。主に女性陣に）」

スバル「確かに、やつてる事はただのスリだからな！ラムとかいたら、ワンチャン細切れにされるかもしねしないしな。」

カズマ「まあな。てか、絶対される。それに、ラム姉はだれよりも自分は自分の味方だつて感じがするからな！まあ、そこがいいところなんだけどな！」

…と、雑談を加えながら掃除をしている。だが、気がついたらいつの間にかそこの場所は綺麗になつていた。スバルとカズマは、驚いた。だが、次の瞬間、青いシエルエットが見えた。まあ、ここまで言つたらわかるだろうが、レムがせつせと掃除をしていたのであつた。そこでようやく気づいた2人は、レムにありがとうございましたとお礼を言つた。ちなみに、ありがとうと言わされたレムが、「どういたしまして！」と、微

笑みながら言つていたところは本当に可愛かつた事をここ記そう。
まあ色々あつて、時は仕事終わりの時間帯に。（作者の都合上時間
はすぐカットします。）

仕事が終わり、時は夕方。夕食の下ごしらえを終わらせて、一休み
しているカズマは、掃除中にもう一回だけ見せてと言われた事を思
出した。

カズマ「あー！疲れた…ヒキニートしてた頃が懐かしいな。ま
あ、楽しいからいいんだけどさ。まあ、それは置いといて、スバルに
言われてたスキルを見せる事にするか。」

スバル「あれ？ほんとに見せてくれんの？じゃあ！ステイールと、
まあ、他なんかあつたら見せてくれよ！なんでもいいからさ？それ
と、ほか見たいヤツいたら連れてくるぜ！」

と、スバルは嵐のように走り去つてしまつた。カズマは、スバルが
戻つて来るのを待つた。数分後、まあ、何となく予想は付いてきたが、
みんなが集まつた。

スバル「よし！見たいヤツを全員連れてきたぜ！ささ、先生！見
せてくれよ！凄いスキルを！」

カズマ「ホントに連れてきたんだ…まあ、いいけどよ。でも、意
外なのがベアトリスだな。てつきり興味ないと思つてたんだけど。」

ベアトリス「別に、興味がない訳ではないのよ。しかも、この世界
の魔法じやないと来たかしら。禁書庫の中の本にもない魔法なんて、
興味がわかなければずがないのよ。」

ロズワール「たーあしかに、私も宮廷筆頭魔術師としての興味があ
るね。」

と、魔法重視の人達は、スキルに付いて興味を示した。

次に、カズマが行うと聞いて來た人達の会話を聞いてもらおう。

エミリア「カズマ！カズマ！「はいはい。カズマです。」またカズマ
の世界の魔法を見せてくれるの？前見た時以来、また見たくてうずう
ずしてたの！だから、楽しみにしてるね！」

パック「ん？また、あの魔法見せてくれるの？僕みたいな大精霊
でも見たことない魔法を使えるなんて、カズマってスゴいね！ま

あ、楽しみに待つてるよ。」

レム「カズマくん！レムはこの時を待つてました！前に見せてくれた。あの芸も魔法も仕組みを暴いて見せます！だからカズマくん！覚悟してください！」

スバル「え？何それ？俺見てない！カズマ！後でそれも見せてくれ！」

カズマ「うん。どうせ見ることになるしな。」

ラム「あら、カズマ。また見せてくれるの？期待しないで見てるわ。そこのバルスは、死になさい。」

スバル「姉様なんか俺だけやけに厳しくない？気のせい？」

まあ、そんなスバルは置いておいて、カズマは魔法をもう一度見せ始めた。

カズマ「まあ、とりあえず。スバル、少し来てくれ。」

スバル「ん？なんだ？つてグギやあー！力が抜ける…」

カズマ「これが、ドレインタツチ。」

ベアトリス「私のマナドレインに似ているのよ。」

カズマ「まあ、多分それと同類だと思う。次は、クリエイトアース。それからのウインドブレス！」

スバル「やつと戻つてきたつて、目がア！」

カズマ「これが、地味なスキルの応用したやつ。それで次は、ンー…：狙撃は、やつたからな…：」

スバル「だア！カズマ！お前さつきから俺を狙つてないか！？」

カズマ「うん気のせい。…：決めた。ちょっと待つてくれ。…：潛伏」

スバル「あれ？カズマどこいったんだ？」

エミリア「あれ？確かにいない！？どこいったんだろ？」

レム「レムも、少し目を離した隙にどこにいるか分からなくなつてしましました。」

ラム「やるわね。カズマ」

ロズワール「たーあしかにいなくなつてしましましたーあね？」

ベアトリス「意外とやるのかしら。カズマってやつは。」

カズマ「…つて感じのが潜伏つてスキルだ！」

みんな「「「「うわ！」」」かしら」

カズマ「いいリアクションだ。まあ、それは置いといて、次はバイ
ンドつてスキルなんだけど… 誰に受けてもらうか…」

レム「あ、じゃあレムが受けてみます！」

カズマ「そうか？じゃあ遠慮なく。バインド！」

レム「カズマくん… カズマくんがたとえどんな趣味でもレムはつ
いて行きますよ！お姉ちゃんとして！」

カズマ「その、恥ずかしいからその事は思い出さないで欲しいのだ
が…」

レム「とりあえず、レムを解放したらどう？カズマ。」

エミリア「そうよ！ずつとこのままだとレムが可愛そうよ？それに
女の子にそんなことしてはいけません！解いたら謝りなさい？カズ
マ！」

カズマ「あっ、確かに。解除！ 悪かつた！レム。痛いところいか
が？」

レム「はい！レムは大丈夫です！」

スバル「やばい。男としてカズマが恨めしい…」

ラム「はつ。バルスはカズマにも勝てない運命なのよ。死になさ
い。」

スバル「今日、本当に姉様が雑な上に辛辣！」

カズマ「次行くぞ？まあ、次で最後でいいか…」

ロズワール「なーあかなか興味深いものばかりだーあね？」

カズマ「次はステイールだ。あんまりやりたくないのだが… 相手
は誰がやる？」

ラム「まあ、レムもやつたし次はラムがやつてやるわ。まあ、簡単
には下着は取らせないわ。」

カズマ「なぜその事を？で、でも本当に確率だし、そんなことはな
いだろ！きっと。たぶん…」

このとき、カズマは大きなフラグを立てたのを知る由もなかつた。

ラム「ふーん。まあ、そこら辺の石をたくさん持てば確率は下がつ

て行くので大丈夫でしょう。」

カズマ「行くぞ？ステイール！」

掲げた右手は、ラムの下着を握っていた。桃色の、少し大人めの下着だった。それを見ていた周りの人々は時が止まつたように動かなかつた。その中の男性軍。スバルは、レムに目潰しをくらい、ロズワールは後ろを向いた。パックはエミリアを起こしていた。その膠着状態からいち早く目を覚ましたラムは、顔を真っ赤に染めて下着を取り返した。次にカズマは動きだし、ラムに土下座をした。他は飛ばそう。とりあえず、その時の会話はこれだ。

カズマ「…つは！すまない！どんだけ誤つても許されないだろうけど、ごめんなさい！何でもするので！許してください！」

ラム「…カズマ。頭を上げなさい。あと、何でもするつて言つたこと忘れないで。」

カズマ「ああ、本当にごめんなさい。自分が死ぬ。殺す以外なら何でもするので。」

ラム「…分かつたならないわ。それと、バルス。貴方は許さない。死になさい。」

こうして、一悶着あつたものの、無事？スキルの説明をすることが出来た。あくまでとりあえずです。これが出てないとか言われても、書かないです。多分。

カズマ「（ラムの顔、真っ赤だつた。それに可愛かつたな…自分でやつておいてあれだけ、あの顔を見れて良かつたです。はい。）